

# 資料渉猟余話

その74

うな著名画家も入って 署のトラックに便乗し、いる。中でも正宗は右 浪台の尹良親王の御陵 四冊の表紙絵や題字等 を詣でた折りの作であ も手がけ、標題の歌集 るという詞書きを添え と特に関わりが深い。 て四首が載っている。

歌集『伊那』と言え 霧旅篇に関する資料 が、飯田下伊那全域の から南信州地域資料セ ンターに寄贈された。 想する人が多いと思う が、これから述べよう とする歌集『伊那』 篇は、短歌革新以後 は、それ以前に、今村 良夫・池田寿一・村澤 武夫・大澤乙井等が発 行した四冊の歌集を指 す。

つまり、①現代篇 穂等の霧旅歌である。 (昭和24年刊) ②霧旅 作者数は八十四人、採 篇(同26年刊) ③古歌 録歌は千九百五十一首 篇(同36年刊) ④続伊 那歌道史(同48年刊) の四冊である。①と② は今村が、③は池田 那谷著名作家も一部含 まれている。そればか ら中心となって編集刊 行した。これらの内の 玉堂・正宗徳三郎のよ

る。彼は、戦中から戦 驚いた。昭和二十五年 後、旧三穂村(現飯田 十二月二十二日の消印

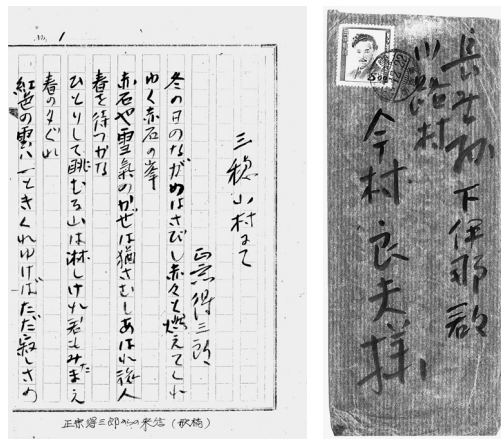
## 歌集『伊那』(霧旅篇)資料から

### 下伊那と縁深い正宗得三郎

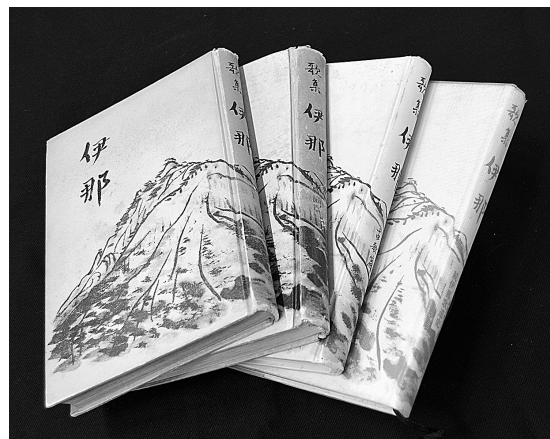
鎌倉 貞男

市)に疎開し、この地 がある封書には、原稿 の作品を多く遺した。 用紙二枚に墨書された そればかりか、正宗 歌稿と短い書簡が入っ は右の歌集にも短歌十 三首を寄せている。三 穂山村にて」と題して は、既に完成していた 七首「鹿塩にて」と題 第一歌集『伊那』を献 して一首「大平峠に遊 呈しつつ、第二集の編 載る。さらに、飯田宮林 出詠歌を要請していた

ものがけ、標題の歌集 るという詞書きを添え と特に関わりが深い。 て四首が載っている。



正宗得三郎からの来信(歌稿)



文中の歌集『伊那』①～④

ことがわかる。编者今 村の努力と労苦を思う べきであろう。

歌稿を見ると、御陵 を詣でた折の四首につ いて不可解な点が生じ ます。まず最後の一首 「東海の青き小嶋は草 枯れて人のつふての数 のみぞふゆ」は、ここ に記すべきではなく、 独立して別個に記され べきであろう。なぜ

なる、そこには「日本 国をかえりみて」とい う詞書きがついている からである。 また、同じくその前 の歌についても疑念が 湧く。この一首は、昭 和三十一年、画伯を偲 ぶ人たちによって飯田 市伊豆木の別曾峠に建 立された歌碑の碑歌で ある。右の歌稿では一 番最後に取り出して書

かかれている上に、内容 も浪台村の歌群とは全 く異なるので、これは 最初の「三穂小村に て」へ入れるべきであ ろう。

なお、この歌の二句 目を、一部に「眺めか はせし」と読む向きが あるが、それは変体仮 名書きの碑歌(片桐泰 嶽揮毫)の誤読から発

した誤りであり、歌稿 は以下のようになっ ている。 三とせ越し眺めうつ せし赤石の山よ忘る なわれ去りぬとも つまり、「かはせし」 は誤読で、正しくは 「うつつせし」である。 (故人敬称略)